

動物園法人の組織イメージ

(第5回懇談会の宿題)

天王寺動物園



必要な組織と機能①

組 織 ・ 機 能		必 要 な 機 能 の 概 要	現 状
トップ部門	経営トップ機能	動物園運営を統括する機能。安定的に収入を確保し、適切に経営資源の配分を行うことであるべき動物園を実現する責任者。中長期の経営計画を示し、それを実現することが求められる。	同機能は不在。
	動物技術部門 トップ機能	動物飼育管理に関する技術部門のトップ。動物園の顔として動物園業界内でのプレゼンスを確保する必要がある（このため最低5年間程度は同一人物が従事すべき）。また、中長期的視点での動物園のビジョンを示すとともに、動物展示施設の建設において方向性を示すことが求められる。	園長は市職員の部長級ポストとされており、2年程度で異動することが多かった。集客サービスに対するノウハウがなく、短期で交代する場合には、国内外の動物園に対して顔が利かない。
	寄付営業の トップ機能	企業や個人から寄付を求める際に、動物園の顔となる機能。社会からの信頼感が重要。	同機能は不在。
経営部門	経営企画機能	動物園全体を見渡して、経営方針や全体計画をリードしていく機能で、客観的根拠に基づいた経営戦略を立案できる機能。	同機能は不在（実質的には本庁ラインである改革担当が実施している）。 マーケティングスキルを有した職員も不在。
事業部門 (事務)	サービス機能	来園者サービスを企画・実施する機能。自ら実施するものと外部の事業者を実施してもらうものがあり、後者の場合は適切な調整を行う必要がある。	園路の整備等は直営で行い、チケットゲート、清掃、警備については、外部委託を行っている。サービスの最前線であるゲート事業が外注されているため、お客様の声のフィードバックに難がある。園内での物販・飲食のサービスは公募手続きを経て民間事業者が実施。H31年度から長期にわたり近鉄不動産の下に実施することになっている。
	広報宣伝機能	積極的な広報宣伝を仕掛けていくことのできる機能。	広報予算がほぼ皆無であり、主にプレスリリースにて広報を実施。OJTにより広報スキルを高める努力はしているが、人事異動によりスキルが継承されない。
	営業機能	寄附や企業コラボなど入園料外収入の確保のため、積極的に外回りなどを行って開拓しつつ、これまでのパートナーとも良好な関係を維持できる機能。	事務所内に営業ラインを設け、新しい寄付の仕組みの企画、企業へのアプローチなど行うようになった。OJTにより営業スキルを高める努力はしているが、人事異動によりスキルが継承されない。

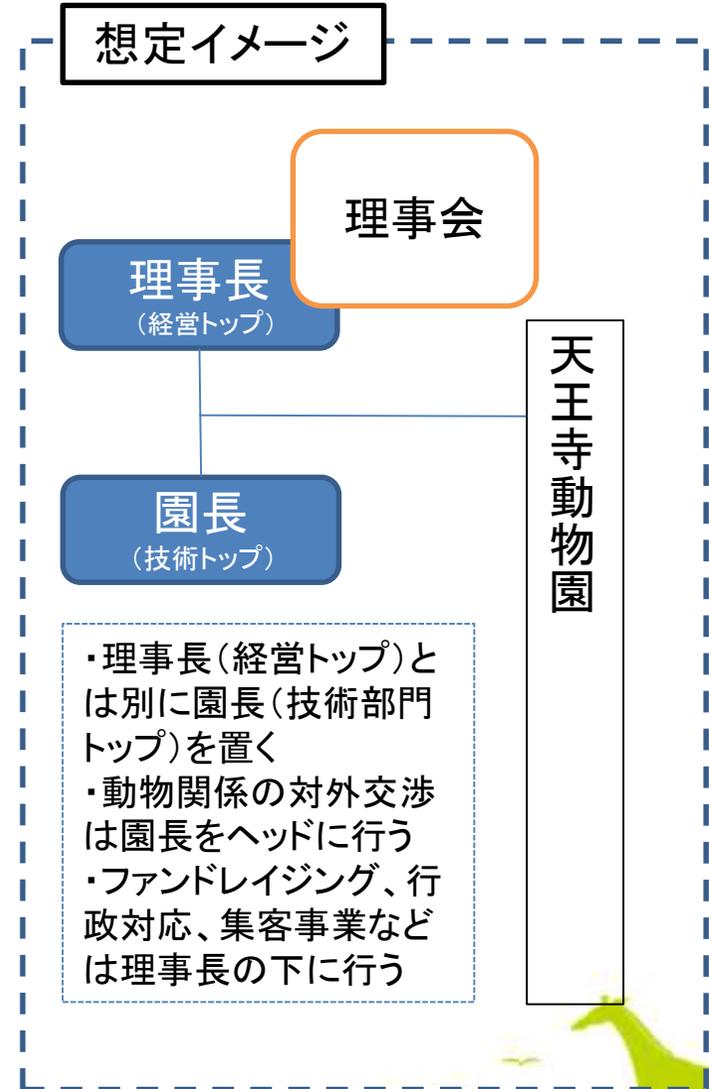
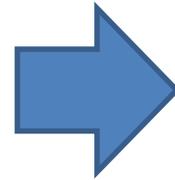
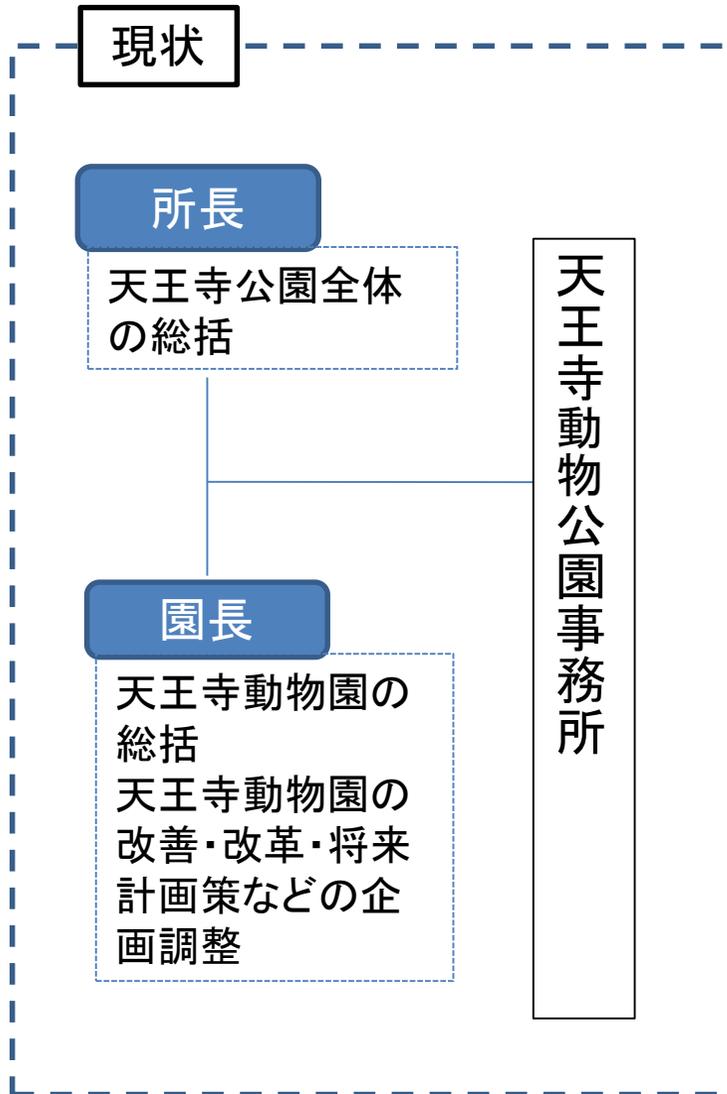
※総務部門（庶務・総務・経理・人事）については、一般的な機能であることから今回の整理からは一旦除外している。



必要な組織と機能②

組 織 ・ 機 能		必 要 な 機 能 の 概 要	現 状
事業部門 (技術)	設備等維持管理機能	園内の多くの施設設備を適切に維持管理する必要があり、また、今後老朽獣舎の更新が長期にわたって求められていくことから、建築・土木・造園・電気・機械のプロで、獣医・飼育員の意見を反映していくことのできる技術職員体制が必要。	維持管理については、事務所に技術職員/技能職員を配置するとともに、設備の日常的な維持管理については外部委託を行っている。
	新施設建設機能	施設・サイン・チラシなどの広報媒体などについて、園内の人目に触れるあらゆるもののデザインを総括的に調整する機能。	大阪市全体で新規施設の建設は都市整備局公共建築部に集約されており、事務所には建築担当の係長が1人いるのみ。飼育・獣医部門の意見反映が課題のひとつである。
	デザイン調整機能	高齡飼育個体の増加や動物倫理に対する関心の高まりなど動物飼育を取り巻く現状を踏まえ、適切に健康管理を行うとともに環境エンリッチメントやハズバンドリートレーニングなど専門技術を備えた体制が必要である。	同機能は不在。何かを作成するときには個々の担当者のセンスによらざるをえず、統一的なデザイン戦略もない。
動物部門	飼育管理機能	動物園の魅力を根源である動物展示について、魅力的なものを実現していく機能。	現状は専門職の獣医と技能労務職の飼育員で構成されている。現在の飼育員は、主に動物と動物舎の維持管理が主たる業務であり、今日的に求められている頭脳労働的要素は必ずしも必要な業務とはなっていない。併せて、採用凍結に伴う高齡化問題が顕在化しつつある。
	展示企画機能	教育普及事業に専念できる組織で、教育プログラムの開発や実践を行う。	展示自体は日常的に行われているが、展示効果は把握されておらず、効果的な展示が求められる。
	教育機能	ボランティア支援は、いわゆる時間の寄附の受入であり、併せて現金の寄附も期待できる。また、生涯学習の場の整備であることから、ボランティアの良好な活動を支えるための体制。	教育専従の組織体制がなく、獣医・飼育員が兼任しているため、受け付けられる量に限りがあるほか、教育を施すことに関するノウハウを有していないため、効果的で系統だった活動に至っていない。
	ボランティアマネジメント機能	今後、国際的な動物交流が必要とされることが想定されることから、国外園館とやりとりのできる語学力を備えた組織体制。	できるだけボランティアが自律的に活動することに任せてきたため、園との関係が希薄になりがちである。ボランティアマネジメントのスキルを有する職員の継続的な確保が課題。
	国際交流機能	動物園の役割の一つである種の保存を実践するためにも、繁殖と繁殖研究を専門とする組織。	個人の語学力や国際関係に頼っており、不安定な状態である。
	保全センター機能		個々の飼育員が個別に取り組んでいるが、ペアリングや施設に限りがあるため、限界がある。大阪府立大学等の研究機関との連携協定を結んでいるが、実効的な研究実施はまだこれから。

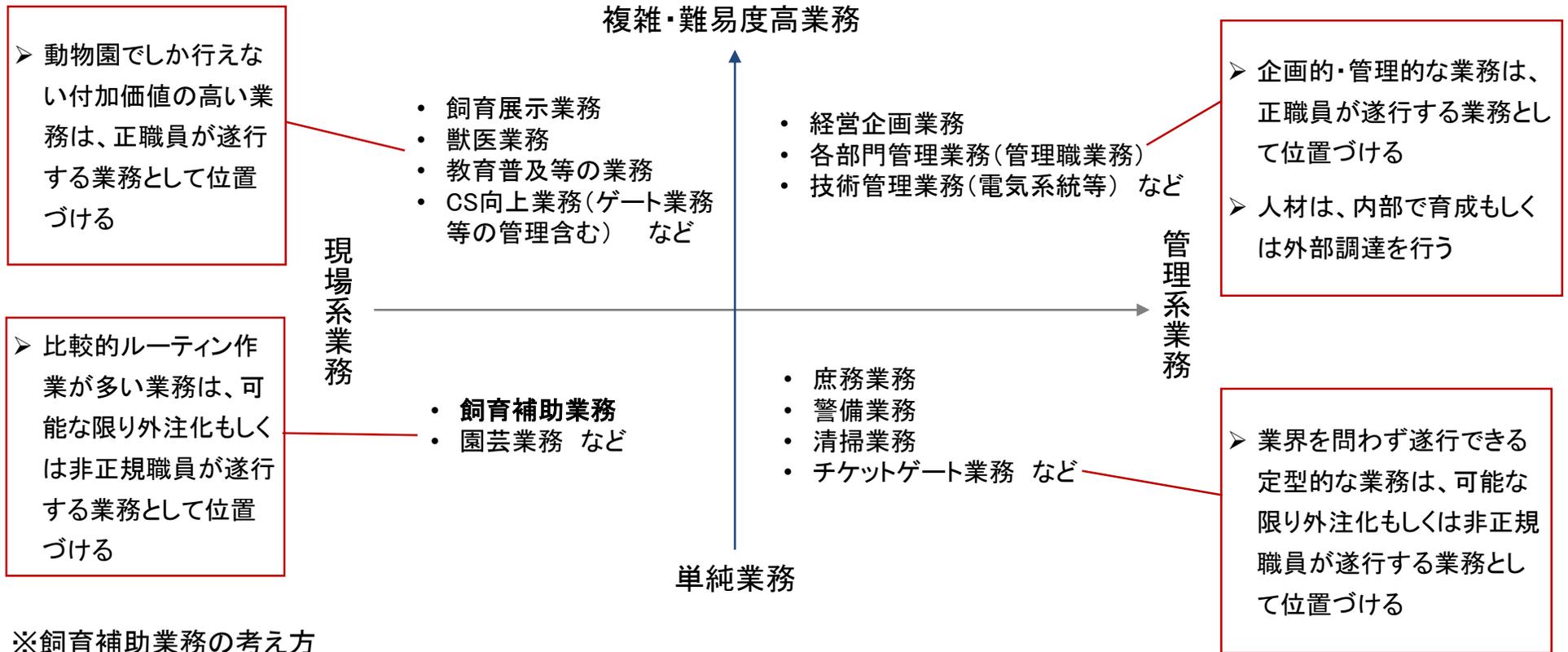
トップ機能のイメージ



人材配置のイメージ

業務を区分し、それぞれに適した人材の配置を想定する。

動物園が直接行うべき業務と必ずしもそうではない業務に切り分け、人材配置を柔軟に変更し、動物園が直接行うべき業務に対して必要な人的資源を投下する。



※飼育補助業務の考え方

飼育に関わるスタッフは、正規職員である飼育専門職をマジョリティとし、飼育補助職員は正規職員の指示に従って、掃除やエサの準備をする想定。

飼育と掃除を分離するのではなく、飼育専門職の仕事には獣舎掃除も含まれるものとする。

